

わが国における遊行僧の研究

——鹿角の杖を持つ遊行僧を中心に——

田 中 夕 子

頂に鹿角を付ける杖は、杖のなかでもひとときわ目をひく『異形の杖』のひとつである。これは京都・六波羅蜜寺空也像をはじめ、『法然上人絵伝』巻一七の法会にやってきた僧侶や『融通念仏縁起絵巻』上巻の市井を歩く僧侶、『七十一番職人歌合』の「はちたき」などの遊行僧の持ち物として中世の彫刻や絵巻物にいくつも見られる。また、この杖は『今昔物語集』のなかで阿弥陀聖の持物であり、『梁塵秘抄』では聖の好むものとして謡われる。

通常、中世の絵巻物のなかで僧侶が杖を持つ例は、老齢者や琵琶法師や旅行する僧、または警備する者などで、それ以外に杖を持つ例はあまり見られず、その杖も先が分かれた鹿杖や、細杖等が多くを占め、鹿角の杖は稀である。また、遊行の徒を描いた『一遍聖絵』のなかでも、一遍をはじめ時衆の僧侶が杖をつく姿はほとんどみられず、遊行僧が杖がつくことが一般的だったと言ひ難い。

小稿では、杖のなかでも鹿角をつけた杖が象徴する意味を、

仏教をはじめとする美術作品や鹿に対する信仰から考察し、この杖を持つ遊行僧が内包していた宗教的な特質を考えてみたい。

京都・高山寺に所蔵される釈迦阿難像に描かれる釈迦像は、右手に錫杖をつき、左手に鉢を持つ。また、菩薩像のなかでも長谷寺式観音菩薩像などは杖を持つが、これらが持つ杖は、人々の前に現われて菩薩行をおこなう遊行の姿を象徴しているということができよう。仏教美術のなかで、杖や鉢を持つ仏菩薩の姿は遊行を表わすものが多く、これらの持物が遊行の象徴であったといえる。このような例は、古くはインドで造られた仏伝のなかの遊行の釈迦像にまでさかのぼることができる。また『毘尼母經』巻五には仏が説法をする時、杖頭に鹿角や鐵をつけたと書かれ、仏教徒のなかで、古くからこのような習俗があったことが知られる。しかし、これと日本の鹿角の杖とを直接結びつける積極的な要素は見付けがたい。

一般的に杖は、老人の歩行の助けや行商人、旅行者の歩行

補助と共に害獣に対する保身など、その用途は多様である。

一方、杖は洋の東西を問わず、様々な意味を象徴している。海外では老齡、旅の他、權威の象徴として神像が持つ例がみられる。⁽²⁾

日本の考古遺物のなかには祭祀に用いられたと思われる杖がある。縄文から弥生時代に杖の頂に付け、指揮杖または笏として用いられたと思われる又状の鹿角製品が、東日本を中心に出土している。中村五郎氏はこれを京都・六波羅蜜寺空也像に代表されるような鹿角の杖の先駆的な例と位置付けを推定して、鹿角の杖にも呪術的な儀礼性があるのではないかと推測されている。⁽³⁾

このような鹿の角を付けた杖を堀一郎氏は仏教とシャマニズムとの結合の産物と推定する。⁽⁴⁾

また、鹿の若角である鹿茸が勝れた薬効を持つと同時に、角が年毎に抜け落ち新しく生えてくることから不老長寿を象徴する靈獸として、アジアでは広い範囲で古くから神聖視されていた。⁽⁵⁾

日本では古来、鹿は祭礼具に頻繁に描かれ、また、『日本書記』や『万葉集』などではしばしば祭祀の装束として用いられており、神獸として神靈視されていた。鹿は千葉徳爾氏は、鹿をはじめとする獸肉の供儀は在来の神信仰のなかでは矛盾していなかったことを指摘する。⁽⁶⁾

石井進氏は千葉氏が論じた鹿観を踏まえた上で『吾妻鏡』建久四(一一九三)年の富士の巻狩りに書かれる鹿狩りのエピソードに注目し、この狩りは神の真意を問うものであったとし、「山神」の象徴としてとらえられた鹿を狩ることは、狩るものが神にその加護を問い直すことと換言することができると説明する。⁽⁷⁾

これは鎌倉時代の仏教的な殺生観が広がる一方で、古来から鹿を狩り神に供え、鹿の一部を身に着け祭儀に奉仕することに対する神聖性が確実に受け継がれていることを示すものといえよう。

近年、絵巻物に描かれる杖が注目され、それを持つ階層、年齢層とそれぞれ持つ杖の形との関係が分析され、検討が行なわれている。赤坂憲雄氏は盲僧をはじめ遊行の僧侶や修験者、商人など移動を常とする人々を〈異人〉の自己同一性を象徴するものとし、彼らを「境の祭祀者」と位置付けながら、彼らの杖には内と外の境界を劃すことを象徴する意味付けをおこなっている。⁽⁸⁾

同じく赤坂氏は「鹿杖考」のなかで、『一遍聖絵』のなかに描かれた「定住者する者」のなかでも、老人、荷物を運ぶ男たち、僧侶が各々持つ杖はそれぞれ特徴があり、特に僧侶の持つ杖は身分的に高位の僧、あるいは老僧、そして僧兵がもっていることを指摘し、杖の種別が身分や階層秩序の内部

にある、ある種の標識の役割を果たしていたことを推察している。⁽⁹⁾

また、網野善彦氏は絵巻物に現われた異形の杖である撮杖に注目し、それはもとは警備・監督のための道具であつたが、それと共に祓い・清めの機能を持つ呪具だったのではないかと推定する。⁽¹⁰⁾つまり、階層や年齢によつて持つ杖が異なり、杖は持主の社会的な役割や機能を象徴していると考えられるのである。

鹿角の杖を持つ者を確認すると、その多くが、阿弥陀念仏を称える遊行僧であつたり、念仏の場に接近する者である。従来いわれるとおり、念仏と鹿角が結びつくのは念仏の鎮魂性と靈魂を祭祀する古来の宗教者の姿が重なるためといえる。しかし、その点で彼らは法然や一遍らの念仏と一線を画していたのではなからうか。

遊行僧が仏教の浸透に重要な役割をはたしたことは周知のとおりであるが、彼らのなかには鹿角の杖にみられるように、顕密の僧侶の姿でありながら古来からの信仰を標榜し、布教する者がいたのである。鹿角の杖は、古来の神信仰と仏教の境界を渡り歩く標識であつたといえよう。

1 『今昔物語集』二九一九「阿弥陀聖、殺人宿其家被殺語」

2 矢野憲一『杖』(平成一〇年一〇月 法政大学出版局)

3 中村五郎「本邦歴史時代の鹿角杖について」(『物質文化』四昭和四四年)

4 堀一郎「我が国民間信仰史の研究」(昭和二八年一月 東京創元社)

5 杉山二郎「葉狹考」(『朝鮮学報』第六〇輯 昭和四六年七月)

6 千葉徳爾「神仏交渉史の一側面」(『狩獵伝承研究』所収 昭和四四年一月)

7 石井進「中世武士団」(『日本の歴史』第二巻 小学館 昭和四九年四月)

8 赤坂氏は築土鈴寛氏が盲人を「堺の神の司祭者」であるとの説を踏まえながら、境界を行き来する盲人を含めた「異人」を、定住民にとつて正負の要素を含めた聖なる者であるとする。赤坂憲雄「異人論序説」(昭和六〇年二月 砂子屋書房)

9 赤坂憲雄「鹿杖考」(二遍研究会編『二遍聖絵』と中世の光景)所収 平成五年一月 ありな書房

10 網野善彦「童形・鹿杖・門前」(『新版絵巻物による日本常民生絵引』解説所収)

11 堀一郎氏前掲書

〈キーワード〉 遊行僧、空也、鹿角杖

(佛敎大学大学院)